

令和4年12月1日

敬愛短大附属幼稚園だより 12月号

幼稚園は生活発表会の練習と準備で年末の世の中よりも前に大忙しです。新型コロナの感染が落ち着いてきたかと思えばまた第8波の到来で各地でも感染者が増加中なので幼稚園は厳戒体制です。第7波では幼稚園でも感染者が増えて感染拡大防止で大変でした。また、今年は、昨年度の感染者はほとんどなかったインフルエンザの流行がオーストラリアの状況からして日本でも感染拡大が予想されています。

さて、最近では園バス内への幼児の置き去りが他県で発生しておりますが、本園では他県の出来事などとは思わずに職員に事故防止を徹底しています。新年度からは安全のために機器が園バスに設置できる方向で国が動いておりますが、機器が設置されたとしてもこの手の事故原因は当然の「やるべきことをしていなかった」などのヒューマンエラーが大きな原因と考えられますので、必ず複数の人が子どもの顔を見ての確認が大切です。敬愛学園の法人も他県での園バスでの事故を受けてすぐさま幼稚園の園バス運行の点検にきてくれました。また、その後に県からも同様の内容で来園がありました。法人も高い関心をもって迅速で適切な行動をしており、大きな法人組織を持っている敬愛学園の配慮は大変ありがたいです。

保護者の方々も登園・降園時などに車や自転車で送り迎えをされている方も増えておりますので、園児を連れての道路の横断や園児の道路への飛び出し防止など安全な通園をお願いいたします。

【言葉という心を惑わす魔物】

バタバタしているうちにあっという間に一年が過ぎて行きます。慌ただしい年末を迎えるたびに新年の今年の年頭の自分の誓いはなんだっただろうと忘れてしまうことがあります。来年はどんな年になるのでしょうか。未来を予測しても必ずしもそうなるとは限らない。人々は混とんとする社会の中でもがきながら生き、そしてその中で喜びや悲しみを感ずります。ほんの少しのことで大きな喜びを感じたり、また、ほんの少しのことで大きな悲しみを感ずります。人とはそういう生き物なのです。

先日、成長するにしたがってどんどん荒れて行き、しまいにはもう後戻りできなくなってしまった幸せとはほど遠いものを背負った子どものことを書いた本を読みました。縁あって親子になっても毎日がやるせなく、心がどんどん荒れ、行き着く先さえも分からないほどになって社会に反抗して攻撃的になり、人を傷つけてもなんとも感じなくなる。ありとあらゆる社会的には悪とされる行動を行い心身ともにボロボロになっても後戻りできない若者になった。

本来ならば当たり前のような環境で育ったならばなりえなかった姿。では、誰が悪いかといえば、誰も責めることができない。人は一度歩む道を外すと転がり落ちるようにどこまでも転落し、自分ではどうすることもできなくなる。自分が攻撃されればそれに対して更に攻撃的になり、後先を考へることもなくなる。そんな人を救えるのは温かい食事と心から相手を思いやるほんの一言の言葉。

信頼していた人からの言葉はどんな刃物よりも相手の心を深く傷つけることがある。そしてその心の傷はもう二度とふさぐことも出来なくなる。

人が発する言葉は時としてどんな刃物よりも強靱なものとなり、そして受けた言葉は消えないで残る。自分が発した言葉に自分の心を悩ませることもある。多くは、そんなつもりで発したのではなくてもだ。

こんな文章を本で読んで自分自身を振り返ることが何よりも大切である。少なくとも、そんな気持ちがあっても相手を傷つけてしまうことがないようにこれからは気を付けようと思えることができればそれだけで傷ついた自分の心を変えることもできる。

明確な言葉をもつ生き物それが人間です。同じ言葉を使っても時と場の状況が異なればその言葉の持つ意味も変化します。「言葉で育つ」大きな課題です。

(園長 杉山清志)